

卷頭言

ダイバーシティを踏まえたキャリア支援

新潟県医師会

理事 野 神 麗 子



この5月17日に、日本医師会主催の男女共同参画フォーラムが、福島県郡山市で「ダイバーシティを踏まえたキャリア支援」というメインテーマで開催された。昨年から日本医師会男女共同参画委員会の委員を拝命し、今回は裏方として初参加したのでご報告したい。

まず、藤田医科大脳外科教授の加藤庸子先生と、東大卒業後にテレビ局勤務を経て、実家の造り酒屋を継いだ斎藤美幸さんが基調講演をされ、ガラスの天井を突き破った女性が業界のフロントランナーとしてだけでなく、多種多様な人との関わりを大切に育んできたことを感じた。我々の歩いてきた道は粘り強い先人（案外、同世代）たちが、手をかけて拓いてくれたものだ。

その後のシンポジウムでは、福島県内で医師不足対策に挑む福島県人材対策室長の話に続いて、医師夫婦2人の育休をサポートした、病院の女性内科部長の話聞くことが出来た。在宅ワークで画像診断や、診療のサポートをされた例から、医療DXによる新たな働き方のヒントが幾つもあった。

シンポジウムの3つ目は、12年前に関東から福島に移住された40代の男性脳神経外科部長、岩楯先生の育休取得までのストーリーであった。移住の際、妻が2人目を妊娠中で、共に福島に来てくれたものの、当初は夫として育児や妻の体調不良に寄り添うことが出来ず、離婚寸前となった経験を率直に語ってくれた。彼の父親は大学教授だったそうだが、家を不在にすることが多く、長らく父とは確執があったという。自身の夫婦関係の修復に向き合うこととなり、医学生を対象にした医学会総会では、若手に「失敗から学べ」「人生の評価は家族から受けよ」と提言した。また、学生や若手医師は職位が高い人や成功者のキラキラした話だけでなく、市井の勤務医や開業医のライフや失敗談に関心が高いという意見には、私も大いに賛同する。誰もがメジャーリーガーにはなれな

いけれど、心地よい自身の居場所を見つけ、大切な存在を愛おしむことはできる。そして、そこに行きつくまでの葛藤は誰しもあるはずだ。失敗には常に理由がある。同じ轍を踏まないよう、人生の先輩としてこれまでに悔いが残ることを後輩に示すことは大きな意味を持つだろう。この日は「子育ての後悔」を医師会報にご寄稿された先輩脳外科医S先生の文面もそのまま紹介された。S先生は出産後、間もなく復職するも、業務が多忙を極め、長男の子育てに時間を割けなかったことを、20年経っても非常に後悔していると綴っていた。大学生になった息子に、「医者にはならないよ。2歳からそう思っていた。なぜなら大変すぎて子供がかわいそうだから」と言われてしまった母親の気持ちを察すると、胸が張り裂けそうになる。2歳の子どもに孤独感を味わわせてしまったという後悔のくさは深く沈み、私にも思い当たる節がある。

さて、演者の岩楯先生は5人目が生まれた時に5週間の育休を取得し、食事の仕度、キャラ弁作り、洗濯など家事を全て行い、現在は家族7人、福島での生活に満足されていると結ばれていた。

これからは医師を続けながら、誰も犠牲にしない、多様な働き方に胸を張れる時代であってほしい。出産育児で離職する女性医師が35歳前後で2割強という日本の現状は、多様性から遠い若年層の生きづらさを物語っていないだろうか。出産後早期に復職可能なよう、突然の欠勤も想定して、職場の同僚にも増えた仕事分の手当をプラスする柔軟性が求められるだろう。この4月からは男性育休を後押しする出生後休業支援給付金と2歳未満の時短勤務に就業給付金が創設された。どのようなバックグラウンドであっても、働きたい医師の未来を描く、それが今の男女共同参画のありかただと感じている。